

国際日本文化研究センター顧問の梅原猛氏と川勝平太知事が、
日本文化に根ざした「平和」について、「草木国土悉皆成仏」をキーワードに語り合った。
(梅原猛・川勝平太共著『日本思想の古層』(藤原書店 平成29年8月10日発行)より抜粋)

中曽根元首相と
国際日本文化研究センター

知事 富士山世界遺産登録二周年の記念日に、富士山を望む日本平の山頂で、梅原先生の揮毫になる「草木国土悉皆成仏」国士は富士なり」を刻んだ石碑が披露されました。「草木国土悉皆成仏」とは、人間はもとより、生きとし生けるものを含む国土をつくりあげているすべての存在が平等であるということ、「国土

は富士なり」とは、富士山が日本の国土の象徴であるということ。それによって先立って「富士山の日(二月二十三日)」に、中曽根康弘元首相が揮毫された「日本一の眺望の地 富士山」を刻んだ石碑が立ち、戦後日本を代表する政治家と哲学者の揮毫になる石碑が二つ並びました。いずれも県民有志の希望とご寄附によるものです。

梅原氏 川勝知事の依頼で、中曽根さんの石碑と並べたいとい

われ、お引き受けしました。私は、中曽根さんを戦後の日本の首相でもっともすぐれた首相だと思えます。

京都の「国際日本文化研究センター」(以下、日文研)は一九八七年に創設されました。当時の中曽根首相は、日本の伝統文化がいかに世界に誇れるものであるかを追究する研究所が必要だと考えた。中曽根首相は京都学派を高く評価しておられたが、その縁で、中曽根首相と桑原武

夫をはじめとする京都学派の学者との懇談の席が設けられ、その席上で、桑原氏から国際的な日本文化研究所創設の提案がなされると、中曽根首相は即座に応じ、創設の運びとなりました。

日本は世界に何を発言し得るか

知事 中曽根首相にも梅原先生にも、日本文化は世界に通用するという強い信念があります。日文研の初代の教授陣は、全国津々浦々から、一流の現役学者を集められましたね。各地の大学の看板教授を引き抜き、すごい存在感でした。

梅原氏 少数精鋭主義で、最初の教授は十五人です。草創期のメンバーのうち、これまで私を含めて三人が文化勲章を受章しました。

知事 日文研の創設に貢献された中曽根内閣の時に有名なブラザ合意がありました。一九八五年です。先進国が、日本経済をターゲットに円高誘導を決めた会議です。日本製品の価格が、わずか一年で、ドル換算で二倍に



日本文化に根ざした「平和」の発信

静岡県知事
川勝 平太

京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。

国際日本文化研究センター顧問
梅原 猛氏

仙台市出身。哲学者。京都大学文学部哲学科卒業。立命館大学教授、京都市立芸術大学学長、国際日本文化研究センター初代所長などを経て1995年より現職。1999年文化勲章受章。

変質させた。神道的なものとは、一種の原始的なアニミズムです。アニミズムの伝統的な神道が仏教を変質せしめてきたのが天台本覚論です。これこそ、日本思想の根本であると思うにたりました。

富士山は、甚だ神々しく、深く高い山で、縄文的です。富士山の雪が解けて豊富な水がもたらされる。その水で農業が行われる。富士山は、山の縄文文化と水の弥生文化が融合した日本の象徴なのです。富士山を国土の象徴とする日本の中心思想が「草木国土悉皆成仏」です。自然の中に神仏を見るという思想であり、ヨーロッパの思想とは異なります。

かつて私は、人類最初の都市文明を生み出したメソポタミアのシュメールに伝わる世界最古の物語である「ギルガメシュ叙事詩」をもとに物語を創作しました。

「ギルガメシュ叙事詩」で語られるのは、一つは自然征服の思想です。もう一つは、人間は死すべきものだという思想です。古代ギリシャの考え方は、人間

もはね上がり、日本製品は西洋市場に入りにくくなった。日本は先進国首脳から懇請され、その要請を飲んだ。それは、ものづくりにおいて、欧米先進国が日本の実力の前に公式に兜を脱いだということだ。

明治以来の「西洋に追いつく」という目標を達成し、日本は自他ともに認める先進国になった。それが一九八五年のプラザ合意の歴史的意味です。中曽根内閣は日本近代史の分水嶺に立っていた。

日本は、経済力だけでなく、文化力を世界に示すことが課題になりました。日文研の初代所長として、どういう姿勢で研究所を運営されたのですか。

天台本覚論と
ギルガメシュ神話

梅原氏 諸外国のことをよく理解したうえで、国際的な視野で日本文化を研究する学問をめざしました。

私はまず事実で検証すること

ができ、そして誰にでも理解できるように哲学をつくりたいと思いました。それゆえ、日本思想、日本文化の研究をしてきた。八十歳になったころようやくわかったのは、端的に言うと、日本思想の核になっているのは「草木国土悉皆成仏」という考え

方だということだ。それは天台本覚論の思想です。天台本覚論の根底には日本の伝統に基づいた神道的なものがあります。それが外来の仏教を



は死すべき存在であるというものでした。ホメロスの『オデュッセイア』などにはつきり語られています。ところが、古代エジプト思想の影響を受けたと思われるプラトンが、最終的に、人間は不死であるという思想を説きます。イデア論です。キリスト教も、人間は不死であるというプラトンのイデアの影響を受けた。それ以降の西洋思想には、人間が自然を征服するのは善であるという思想と、人間は不死であるという考え方があります。

一方、日本の天台本覚論は、人間ばかりか草木も国土もすべて仏になり神になるという思想です。そして、人間は死すべきもの

であると考えられています。親鸞の思想も、根本は、人間はあゝ世へ行き、再びこの世へ還つてくるというものです。

人間が自然を征服するのが善であるとともに、人間は不死であると考えた西洋思想は、これからの人類哲学として不適當ではないか。すべての生きとし生けるものに神仏が宿ると考える思想や、人間は生と死を無限に往復すると考える思想の方が、現代科学にも合っています。

知事 先生の『ギルガメシュ』は戯曲ですが、文明論でもあり、大著です。ギルガメシュが、森の神フンババを殺す、言い換えると自然を征服する。自然征服の原

起こりますが、それはボスの交代の際のみという限定的な現象です。人間のように集団をなして殺し合いをするというのは、

まずないですね。これは、互いに異なる言語を使う人間同士は同類と認め難いことから起こったのではないかと思うのです。

知事 先生は、戦争をやめさせるために「九条の会」の呼びかけ人になられましたね。

九条の戦争放棄の元をたどると、カントの『永遠の平和のために』にゆきつきます。その後、不戦条約、国連憲章などがあり、それらをふまえて、一番きびしい条文にまとめたのが九条です。武力による威嚇とか武力の行使はせず、

永遠に戦争を放棄すると謳っている。

梅原氏 人類の将来の理想です。人類が生きながらえるには、やはり永遠平和の思想が必要です。これがなかったならば、やがて人類は殺し合いにより滅びます。それをくい止めるのが憲法九条だと思います。

知事 国連憲章には、攻められた時には自衛権を行使でき、個別的自衛権と集団的自衛権とは固有の権利だとあります。一方、日本国憲法九条では、武力は一切使わないと宣言している。日本国憲法は国連憲章をさらに純化している。国連憲章を日本国憲法に即して戦争放棄の方向に

型の思想を示した神話ですね。それが西洋の後の自然に対する態度の根幹になり、近代の自然科学を支える自然征服の基にもなりました。私たちは「旧約聖書」を通して西洋の自然観を学んだつもりになります。それに先立ってギルガメシュ神話があり、先生がその神話の構造を見抜かれて、西洋の自然観の原型が知られるようになりました。

それに対して、先生は森を大事にする日本の縄文文化を対置されます。三内丸山遺跡（青森県）では、縄文時代にはクリ林が造林されていました。それ以前の三内丸山はブナ林であったことは安田喜憲さんなどの花粉分析によって知られています。

クリを植林していたので、いわば森の庭「フォレスト・ガーデン」です。比較分明的にいえば、「森を壊す文明」と「森を育む文明」の違いです。天台本覚論は、一見、中身はアニミズムのようですが、高等宗教の仏教を媒介にしています。そのエッセンスが「草木国土悉皆成仏」です。それは、縄文以来のアニミズム

改めるのが、真の積極的平和主義になると思います。

平和を積極的につくるために一九四五年秋、ロンドンで国連の教育・文化会議が開かれ、翌年にユネスコ(UNESCO) 国連教育科学文化機関が発足しました。日本国憲法の公布と同じ時です。ユネスコ憲章は前文で、戦争は人の心の中で起こるから、心の中に平和の砦をつくらなければならぬ、と謳っています。ユネスコの教育・学問・文化を通して平和をつくるという立場は世界の共通認識です。

中曽根さんが、「政治は文化に奉仕する」といわれたのは、政治家としてまっとうな発言です。私も知事職をあずかり「政治も経済も文化の僕である」と明言しています。人々を幸せにすること、それは人々の生活文化を豊かにすることです。それが政治や経済の活動の目的です。

教育・学問・文化の活動は人類の理想の一翼をなっています。**梅原氏** 平和といえば、徳川家康は大変な人物だと思います。明治以後、藩閥政治が徳川を倒

が、仏教を媒介にして理論化されたものですから、原始的なアニミズムではありません。

梅原氏 そうですね。だからこそ、現代文明を救う思想だと思います。アメリカは広大な森林地帯であったのをほとんど開拓してしまいました。ところが日本は、現在まだ国土の三分の二は森林です。すばらしいことです。これはやはり、森には神がいるという古来の信仰が今も残っているからではないかと思えます。日本の文明は、森の神フンババを殺した西洋の文明とはまったく異なります。そして中国の文明とも異なります。日本列島でこそ花咲いた甚だ特殊な文明だと思えます。私は、日本文明の中に、将来の人類に必要な思想があると考えています。

九条と国連憲章

梅原氏 現代の話に戻りますが、最近考えているのは、同類の大量殺害を平気で行うのは人間特有の病ではないかということです。勢力争いで同類を殺すことは、サルやライオンなどでもして、家康の評価は低くなりましたが、やはりすぐれた政治家だと思ふ。芳賀徹さんの話によると、最近、家康の再評価、江戸時代の再評価が進んでいるそうです。

知事 「パックス・トクガワナ（徳川の平和）」は芳賀徹先生の造語ですが、徳川時代の形容として見事です。「パックス・ローマ」 「パックス・ブリタニカ」 「パックス・アメリカーナ」が念頭におかれている。西洋の軍事ベースの世界秩序ではなく、文化ベースの平和な文明という特徴をもっています。

梅原氏 日本には平安時代の三百年と江戸時代の二百年という平和な時代があった。そのような国は世界に例がありません。ヨーロッパ文化、とくにアングロ・サクソンの文化が形成されたのは最近です。日本には千何百年という歴史を誇るすばらしい文化があります。そのうち、平安時代三百五十年、江戸時代二百六十年が平和の時代です。現在の戦後七十年の平和はまだまだ短い。今の平和が五百年は続いてほしいと思います。